

2022年6月5日 ペンテコステ礼拝

説教題「御言葉を宣べ伝えなさい」第二テモテ 4章2節 ab

主任牧師 加藤 誠

「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。」(第二テモテ4章2節 ab)

ペンテコステは二千年前、主イエスの弟子たちが聖霊の注ぎを受けて、「御言葉を宣べ伝えなさい！」と、世界中に派遣された日です。それは常識的には考えられない、不思議に満ちた出来事でした。ふだんへブライ語しか使っていない弟子たちが突然、世界の様々な国の言葉で主イエスの福音を語り始めたのです。

「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても」。この「折」という言葉は英訳聖書では「season」と訳されています。御言葉を語るのに「ふさわしい季節／状況」であっても「厳しい季節／状況」であってもという意味です。その意味では、最初のペンテコステは御言葉を語るには「最悪の状況」でした。主イエスは極悪犯罪人として十字架で処刑されたばかり。「あのイエスの弟子たち」と分かったならば、たちまち憎悪に満ちた視線、馬鹿にしてあざ笑う視線に取り囲まれることになる。常識的に考えたらエルサレムから一度ガリラヤに退散して、人びとの気持ち柔らかくなった頃合いを見計らって、イエス・キリストのことを語り始めるのが良いのではないかと思います。けれども、その「最悪の状況」の中で、弟子たちは聖霊により主イエスの証人として立てられていったのです。

それにしても、この「最悪の状況」の中で、ユダヤ人を恐れて部屋の中に閉じこもっていた弟子たちに、どうしてこんな不思議なことが起こりえたのでしょうか。

二つのことに目を留めたいと思います。一つは、弟子たちは復活の主イエスから「神の国」についての解き明かしを繰り返し受けたことです。「神の国」とは「神の愛」のこと。神の子が十字架で人びとに捨てられるという、どんなに絶望的な状況に、世界が見えたとしても、「神の国」「神の愛」の約束は変わらない。罪に沈み、悲惨を毎日生み出している人間をそれでも愛したもう「神の愛」は変わらない。そのメッセージを弟子たちは聖書から聴き直したのです。その意味でペンテコステの「聖霊によるリコンストラクション」、弟子たちの「再構築」は、聖書の中に「神の愛」の言葉を繰り返し聴き直していくところで起こされたのです。

もう一つ、目を留めたいのは、ペンテコステを前に弟子たちは「祈ること」を学び直したということです。それまで弟子たちはどこか「主イエス任せ」でした。主イエスにお任せしていたら、自分たちは居眠りしていても何とかなったのです。主イエスの祈りの格闘を間近で感じていながら、彼らには「自分の事がら、自分の闘い、自分の祈り」になっていませんでした。けれども主イエスが天に戻られて、自分たちだけが残され、「これからはお前たちが、わたしの証言者となって世界に遣わされるだ」とバトン（責任）を手渡されて初めて、弟子たちは「祈らなければ何

もできない自分たちであること」を思い知らされたことでしょう。「祈る」とは「神さまの前に小さくなること」です。弟子たちが主イエスに「私たちの信仰を増してください」と願った時、主イエスは「からし種一粒の信仰があれば十分だ」と言われました（ルカ 17：6）。「大きくなるのではなく、神の前に小さくなれ！」と教えられたのです。「神の前に、自分の弱さ、未熟さを知る者となれ！小さくなれ！その時、神の力、聖霊の注ぎを体験することになる！」と。弟子たちが「福音を伝える」という神さまからの大切なバトン（責任）を自覚して、自ら祈る者とされた時、聖霊によるリコンストラクション、ペンテコステの出来事が起こったのでした。

今日の多言語聖書朗読に、ミャンマーのチン族の友が加わってくださったことを神さまに深く感謝したいと思います。ミャンマーから日本に学びに来られて、将来はミャンマーと日本をつなぐ仕事をしたいという夢に向かって一生懸命に学んでこられた時に、国軍によるクーデターが起これ、その夢が閉ざされてしまったと聞きました。国軍は少数民族の人びとの中でも、クリスチャンの多いチン族の人びとに憎悪の目を向けて町や村を焼き払ったりしており、母国におられるご家族のことで、どれほど毎日胸を痛めておられるだろうかと思えます。が、チン族の方たちは毎週の日曜日に東中野の教会に集い、励まし合っておられます。普通であれば出会うことのない方たちと、神さまは今日一緒に礼拝する機会を与えてくださいました。それは、チン族の人びとにも日本の私たちにも、同じイエス・キリストという「共通の宝」が伝えられてきたからです。具体的にはそれぞれの国に宣教師が派遣され、それぞれの言葉に聖書が翻訳されて、同じ神さまの愛を自分の言葉で聴くことができるようになったプロセスがあったからです。自然に起こったことではないのです。主イエスの時から 2022 年の私たちに至るまで、誰かが「主の呼びかけ」に答えて、聖書を開き、祈り、福音を伝えるバトンを自らの責任として受け取って応答してきました。その格闘のプロセスがあって今日、私たちはここで共に礼拝する恵みにあずかっています。そこにはどれだけのクリスチャンの信仰の闘いと献身がつけられてきたことでしょうか。福音は聖書に翻訳されるだけでは伝わりません。身をもって伝える人が必要です。福音は「人から人へ」、体温とぬくもりをもって伝わるものだからです。

大井教会の歴史においても、自然に、なんとなく、毎週の礼拝が続いてきたわけではありません。戦時中、教会の活動が休止に追い込まれる中、疎開先の農家の納屋で、それでも家族で聖書を開き、祈り続けた教会員たちの信仰の闘いがあったからこそ、今の礼拝に私たちがつながられていることを覚えたいのです。そして今日、私たち一人ひとりも、「あなたもまたイエス・キリストの証言者として、この世界を歩いていきなさい、隣人のところに出かけていきなさい」と聖霊は励ましてくれています。「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても」。この聖霊の励ましを受けて出かけていきましょう。